

---

# かみわざっ！

近衛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かみわざっ！

### 【Nコード】

N6601Z

### 【作者名】

近衛

### 【あらすじ】

可能を不可能にする業

神業、そんなものがあつたらいいな

そんな風に思ってた子供の頃、でも実際に手にしたらそれはそれでいいもんじゃないのかもしれない。

なんでもありの神の業、一人に一つだけの業、あなたならどんな業が欲しい

## オープニングは紛争から（前書き）

初めて書かせていただきます。

内容よりも完結させることをメインとしていきたいです。

暖かい目で見守ってください

## オープニングは紛争から

神業：それは神のなせる業、その業を使うことの許されたそんな夢の物語

井の中の蛙大海を知らずなんて諺があるけど僕から言わせれば、井の中の蛙は決してばかにされることはない。

大海なんて知らずとも知ろうとも何にも変わらないからだ。

広い世界を知り、自分よりも強いものを知った所で打ちひしがれるなんてことは、実際はそんなにないからだ。

ましてや井の中の蛙が井の中で自分が最強だとは思っちゃいけないさ、いつだって思っちゃいけない。

カーテンの隙間から朝の日差しが：なんてごく普通のオープニングを期待していたかもしれないけれど、やっぱり期待には答えられない。

始まりは昨日だ。

モテキなんてものは、漫画や映画の中の話だと勝手に思っていたのにまさか自分に降りかかるうとは…

そして簡潔に今の状況を話すと、二人の女性がまあ同級生（高一）なので女の子と言う表現がいいのかもが僕を取り合いをしている。

普通ならばこんなときどうすればいいのだろう、普通とは難しい何がともあれ、昨日からのモテキ続きで僕の体はボロボロなんだ…もちろん性的な意味は含まれていない。

昨日は八人の女の子に「あなたが欲しいのあなたの命が」なんてラブコールを受けてしまい、いやはや恥ずかしいな—

でも、最近の女子高生はカポエラや柔術、合気道に剣道そんなものを軽々と使えるだなんて時代って怖い怖い。

今日の前でハードな実にハードな殴りあいを繰り広げている女子高生の勝者が僕を殺す権利を得るらしいんだけど自分は許可を出した覚えはないし、ターゲットにされる覚えも全くない。しばらくたって女子高生の紛争が終わった…。

あーついに自分の番が来てしまった、と思いながら重い腰をあげる。

仲月菊花

「なかつききつかか…なんか強そうな名前だなあおい」  
ついつい心の声が漏れる。

別に、菊花さんには恨みはないし恨まれる理由もないとは思っけど、相手にその気があるならやっぱり戦わなきゃならないんだろう。

「井の中の蛙か…憧れるな」

なんて決め台詞のように囁きながら臨戦態勢をとろうとした。

「紫陽扇歌さんですよね分かりますか私ですよ菊花です」

目の前の美少女が語りかけてきた。

その時予鈴が校内に鳴り響いた。

僕の中ではギャルゲーのオープニングが流れ始めた気がした。

名前なんて呼ばれた日にはそれが青春だよ（前書き）

なるべく内容を濃くしていきたいと思いつつも、頭に浮かんだことを書いてしまふ近衛です。

やっぱり始めたばかりでうまく書けずに、設定がふわふわしていますがこの先も是非読んでください

## 名前なんて呼ばれた日にはそれが青春だよ

長い沈黙が流れる。

まさにしーんって言う感じだった、まあ無理もなく菊花さん側は僕のことをフルネームで知っているらしいけど、僕は全く記憶にないからだでも命を狙われるほど恨みを買っている様なので多分深い仲なのだろう。

沈黙を破るように教師の声、せつかくの女子高生とイチヤイチャタイムをハゲで中年で妥協して結婚したブルドックのような妻のいる教師に邪魔されるなんて、不覚

「休み時間、屋上でまってる」  
すれ違い様に菊花さんが行っっていった。

まだまだイチヤイチャタイムは続く、胸が熱いぜ言っとくけど性的な意味は含まれていない。

胸は性感帯じゃないからだ。

休み時間が待ち遠しくて全く授業に身が入らない、普段から身が入らないのは変わらないがここ三年間でトップクラスのやる気の無さに嬉しさすら込み上げる。

ついについについについに、休み時間が来た。

お昼の弁当を片手に屋上へ急ぐ、途中に背の低い女の子が廊下で爆弾を仕掛けているのも気にならないほど急ぐ。

屋上の扉を開けるとそこには…

命を狙っていた8人の女性プラス菊花さんがいらっしやっただ。

「えっと…これは何て言う…エロゲですか」

またもや、心の声が漏れる。

菊花さんがまた始まった見たいな雰囲気を出しながら僕に話をかける。

「紫陽扇歌さん、いやせんちゃんおひさだね」

なんか知らないけど異常にフレンドリーな菊花さんに驚きを隠せず  
に沈黙。

「せんちゃんが忘れてるのも無理ないかもね、私とせんちゃんは夢  
のなかだけでしかあったことないからね」

余計に意味がわからなくなってきた、確かにこんな美少女を妄想で  
産み出したことはあるし、何度か夢で見たことはあるけど。  
今考えると不思議なことが一つある。

仲月菊花と言う名前を僕は知っていた、制服に名札がついているわ  
けでもなければ名乗った訳でもない。

なぜ名前を知っていたのか、それは簡単なことで初めから仲月菊花  
を知っていたから。

頭の中で、夢の中で、そして今日の前にいるからである。

「菊花さん…頭の中では無理矢理整理整頓して見たものの…やっぱり  
納得が行かないんだけど」

そう言われるのを待ってましたと言わんばかりに先走り説明を始め  
る。

「まずは簡単に説明すると、昨日からのモチキは私が仕組みました  
それはまあ、仕方の無いことだったので、あとは私があなたの妄想  
で産み出された訳ではなくあなたの考えに入り込んだだけなんです」  
正直菊花さんの説明だと理解するまでに、この小説は終わってしま  
うので簡単に説明すると。

昨日からのモチキは僕が本当に紫陽扇歌なのかを試すために仕組ん  
だものらしく、そして次に僕が菊花さんを知っていたのは僕の記憶  
の中に自分の存在を埋め込む力を使ったらしい。

これが大体の真相だった。

でも答えが出てこない、なぜ僕の記憶の中に来たのかその答えがな  
い。

「菊花さん一つ聞いてもいいかな」



菊花さんに訪ねる。

「何で僕の記憶の中に来たのか聞いてもいいかな」

菊花さんは笑った。

なんだかちよつとばかにされている感じもするくらい鼻で笑った。

「そんなの君がよく知っていることじゃないのかなせんちゃんは始まりなんだから」

始まり久しぶりに聞いた、いや、ただ都合の悪いことだから忘れていただけなのかもしれないけれど。

始まりとは、僕の持つ神業だ。

神業なんてものがどこで受け取るのかは知らないけれど産まれた時からつかえた。

その力を皆は恐れた、始まりの力皆は親しみと軽蔑の意を込めて僕のことをスタートラインと読んでいた。

まあ、病院内での話だ。

スタートラインは始まりの力、何兆もの業が在るなかでスタートラインは始まり、全ての業がスタートラインから始まっている。

派生系の業もあるものの、根本はスタートラインから始まっている

「せんちゃんは多分わかっているとと思うけど、今日から始まるんだよ」  
全くもって忘れていた。

今日から始まるのは青春だと勝手に勘違いをしていた、なんて恥ずかしいやつなんだ僕はと自分を非難していた頭の中で。

「せんちゃん…もしかして開戦日わすれてたの」

凶星だった。

嫌なことはすぐ忘れる体質なんだから仕方ないんだけどまあ、その嫌なことをすぐ忘れるのもスタートラインで作り上げた僕の業なのかもしれないけれど。

とにかく全てを理解した。

スタートラインである自分のやらなければならぬことも理解した。僕が殺ることは、神業を与えること相応しい人物に相応しい業を与

えること。

そして神前試合に勝つ事だ。

## RPGって基本四人パーティーだよな

お弁当を食べながら菊花さんと話をする。

「とにかくせんちゃんも自分の代わりに戦ってくれる人をあと四人探さないと半年後にある神前試合に参加すら出来ないんだよ」

菊花さんは器用にカルボナーラを食べながら言う、なんで学校の屋上で皿に盛ってあるホカホカのカルボナーラが在るのかは聞いてくれるな。

「神前試合か、うつすらは覚えてるんだけど…やっぱり戦わなきゃダメなのかな」

別に怖いとか、怖くないとかじゃなく【人に殺らせる】所が気に食わない。

別に、怪我したら可愛そうとかそんなにいい人ではないので別にいいんだが。

気に食わないのは自分が参加できないこと、特段好戦的な性格では無いにして自分が参加したほうが手っ取り早いからだ。

相手がどんな業を持っていようが打ち消す業を産み出すことは簡単だからだ。

ここで一つの疑問が生じる。

「僕以外にも始まりがいるのかな」

これだ。

自分の中では答えは出ていた。

答えはYesだ、もしも始まりが僕一人ならば他に業を与えることができる人間はいないイコール僕以外の始まりにつながる。

菊花さんはカルボナーラを食べ終えてからゆっくり口を開いた。

「いないよ、始まりは一つ、スタートラインが何個もあつたらダメ

だよ」

予期せぬ答えが帰ってきた。

だったら僕は僕が業を与えた人を倒しにくくってことなのか。理解はできるが納得のいく理由は何一つない、一人で対戦ゲームを二つのコントローラーでやっているようなものだ。

なんだその最先端ひとりあそびは、ワクワクするじゃないか一人遊戯王以来のワクワクだよ。

菊花さんは何かを思い付いたかのように話を切り出した。

「あつ、そうだね敵が明確じゃないからいまいち状況を把握出来ないんだね」

すっごく馬鹿にされた気分だ。

本人にはそのつもりはなさそうだけど、そこまではつきりと現状を見抜かれてしまったらなんだか浅はかな人間性が露呈してしまった気がしちゃう。

こんなことを自分で言う事も浅はかさアピールとしては十分なのかも知れない。

「確かにスタートラインでしか通常は業を与えることできないはずなんだけど、疑似スタートラインを産み出した人間がいるの」

疑似スタートライン

初めて聞くキーワードって訳じゃなくて、以前にも話を聞いていた男の子からか女の子からか覚えてはいないし、実際は聞いていないかもしれないがその言葉は知っていた。

なんだか時代は横文字っぽい確かに始まりよりスタートラインの方が能力って感じがする。

まあ、こんなことは今考えることじゃないか。

「その疑似スタートラインを作った相手を倒してせんちゃんは本物

のスタートラインにならなきゃいけないの、そうじゃないとせんちやんは消えて疑似スタートラインが本物のスタートラインになつてしまつ、力を誇示できた方が本物になるんだよ」

なんて分かりやすい実力社会

本物が偽物に負ければ、偽物が本物になる。

本物がいつも本当とは限らないってことか。

消えてしまつと言う事実を聴いたとしても、僕は戦いに参加したくはなかつた。

逆に聞きたい、負ければ死ぬ戦いを赤の他人に任せられるものが、ましてやたつた半年で集めた仲間を命を預けるなんて出来ない。

と言う事はあと半年で死ぬのか。

進級出来ないな、まだ青春を謳歌してないな、入学してから三日で死の宣告なんて穏やかじゃ無さすぎるだろ。

もつとラブコメ的な展開を求めていたのに。

部活動とか初めてたらスポコン物に変わつてたかもしれないのに。野球とか良いな。

いやいや、なんか話が変わりすぎてますよ扇歌さん、いや、せんちやん。

自分をせんちゃんと呼んだのは初めてだけど、意外と気分を悪くする。

嘔吐しなかつたのが不思議なくらい。

そう言えば、神前試合とやらは誰が開催するのだろうか。

戦わずにしてすむ方法があるのかもしれない、馬鹿馬鹿しい戦いなんて基本は話が噛み合わずに起こることの方が多いんだから、この戦いも話し合いで解決できるかも。

「菊花さんは誰が神前試合を開催しようとしてるか知ってるの」

「神前試合は私が偽物に申込んできたよ、私も戦うから頑張ろうね」

不意をつかれた。

一番の敵は仲月菊花だったのかもしれない。

「その神前試合とやらはキャンセルできないのかな」

我ながら格好の悪い判断だった。

護身自分の身を護る事だけを考えた発言だった。

今では後悔している。

何故なら僕が発言を終えた瞬間に、菊花さんの回し蹴りが僕の首にクリーンヒットしたからだ。

見事に頭の中の悪い判断がクリーンされていく、なんて高性能な掃除機なんだ。

電気要らずで脳内クリーンだなんて、最先端科学もびっくりダイソンもびっくりして吸引力落ちるだろ。

「神前試合をキャンセルしたらあなたは死ぬの、理不尽かもしれないけど疑似スタートライン側はスタートラインが邪魔で、だからあなたを消しに来るきつともう学校内にも刺客はいるの、それなのにあなたはまだそんなこと言うの」

菊花さんスーパー激怒だ。

あんまりふざけたくはないけど、メロスも驚愕するくらいの激怒だ。メロスだってムカついたからといって王さまや、セリヌンティウスに回し蹴りをしないだろうから。

「私は、せんちゃんを守りたくて護りたくてまもりたくてここに来たの、きつとせんちゃんは覚えていない病院であったことを私を助けたことを自分が犠牲になったことも」

自分が犠牲に。

病院で助けた。

あーそうだ。

全部が繋がった。

仲月菊花、産まれた時から大きな病にかかっていた。

体は自由に動かない、言葉は少しは喋れるが聞き取りにくい。

そんな女の子だった。

彼女も僕も親に捨てられた。

彼女は要らない子として、僕は必要な子として実験施設に実験の道具として出会った。

しばらく二人で過ごす内に二人は大分仲良しになってしまった。

仲良くなることは良いことだったけど、この場所においては残酷な事だ。

仲がよかったあの子にもいずれ科学の進歩の犠牲になる日が来るんだから。

その日は意外と早く来てしまった。

その日から三日間僕と彼女の二人だけのRPGが始まった。

そう言えば、施設で彼女とドラクエをやったことがあったけどその時は一人パーティーだったな、僕が勇者で彼女も勇者で。

## 昔話

記憶と言うものは非常に曖昧で、それでいて簡単に塗り替えられる。無かったことにも出来るし無かったことをあつたことにもできる。

彼女、仲月菊花に出会ったのは幼少の頃だった。

まだ寒くて、日が上るのが遅く遊ぶにはとっても不都合な冬の日遊ぶとか遊ばないとかいつていられる場合はなかったあの日彼女と出会った。

実験施設で出会った。

彼女は生まれつき体が不自由で、うまく話すことも表情を作ること出来ない

そんな彼女が実験施設に送られてきた。

用は売られたんだらう。

親に家族に見捨てられたのだらう。

そんなやつらを僕は何人も見てきた。

ここに居るやつらはみんなみんな、邪魔者で家族に捨てられたそんな人たちだ。

僕の場合も例外じゃなく、金と引き換えに売られた。

変な力のせいで

この研究所は、僕の力を他の人の体に移植して人間兵器を作り出す。それを目的に作られた施設

そんなところで彼女に出会った。

初めは面倒だった。

毎日、毎日聞き取りにくい話し方で怒っているか笑っているかわからない表情で、「おはよう」「おやすみ」そんな声をかけられるのが面倒だった。

そして、嬉しかった。

回りの子供たちは泣きじゃくっているだけでうるさくて困った。



だけど彼女は決して泣かなかった、いや実際は泣いていたのかも知れないが、全くわからなかった。自分も不安なそんな状況で毎日挨拶をかかさなかった彼女に次第に惹かれていった。

いつか別れが来てしまうそんなことは僕だってわかっていた。それでも彼女に日が上るのが自分あまりに情けなかったと今は思う。

何日も経ち他愛ない話をするようになった。

もちろんほとんどわからない、何の話かも何を言っているのかもその表情もわからない、そんな彼女との会話がすごく楽しかった。

彼女が来てから4ヶ月が経ち遂に彼女が実験室に運ばれるそんな日が来てしまった。

やっと出来た友達を失うのが怖い、もとをたどると僕の方で何人も死んでいる。

それでも自分の意思では無かったので全く罪悪感は無かった。

でも今回は訳が違う、大好きな人を自らの力で殺してしまうそんなことが起こるのをまだ子供の僕が「あれは仕方の無いことだ」とは割りきれなかった。

とうとう彼女が実験室に運ばれる。

彼女と目があった。

彼女は僕を見て微笑んでいた、全くわからない表情でこっちを向いて微笑んでそしていった。

「楽しかった」「ありがとう」って

他の人には聞き取れなかったかも知れないが、僕にははっきりと聞こえた。

僕はRPGの勇者みたいになれなくてもいいから、たった一人の彼女を助けたいと子供ながらに思った。

まずは瞬間移動して電源設備と予備電源を破壊しにいった。

電源設備に通常の数百倍の電流を流してショートさせた。

これで彼女はひとまず死ぬことはなくなった、しかしこの次が問題だった。

実験室の扉は中からしか開かない作りになっている、壊すことはできるが、中に居る彼女に被害が出てしまう。

早く決断しなければ施設の異常を把握して警備会社の人間や警察が来てしまう。

今思い付く方法はただ一つ、彼女に自由を与えることだった。

そのあとの事を考えることは全くできなかった、出来たのかもしれないけど出来なかった。

彼女の頭の中に今の状況と体を自由に動かせるようになる力を送った。

まさか扉の向こうの相手に与えられるとは全く思わなかった。

扉が開き、彼女が飛び出してくる。

「ありがとう」

満面の笑みで僕に抱きついてきた、どんなゲームをクリアしても楽しくなかった、でも彼女と一緒にするゲームはクリアできなくても楽しかった。

本当に感謝するのは僕だったのかも知れない、「ありがとう」聞けないように僕は呟きながら彼女の手を引いて研究所をでた。

行く当てもなく二日間歩き続けた。

足は痛いし、お腹はペコペコだし、重いし。

逃亡後彼女は目を覚まさなかった。

一度だけ「お腹すいちゃったね」とだけ言っていたが起きていたかもわからない。

原因はわかっていた。

僕が与えた力の後遺症

小さな体はその莫大なエネルギーに耐えきれずいずれは死ぬ。

わかっていたけど、そうするしかなかった。

彼女を助けたいと思ったそれは間違いじゃないし今もおんなじ気持ちだ。

彼女を背負っていた背中はまだ彼女の暖かさが残っていた。

この暖かさも、あの時の笑顔も全てを消さなければならぬのに。僕は彼女を助けるために残酷になった。

彼女の記憶から僕と力と今まであったことすべての記憶を消した。記憶に無い力は存在も無いのとかわからない、力が発動することはない。

そうして僕は彼女を忘れていった。

これが仲月菊花と紫陽扇歌の出会いと別れだった。

しみりしてしまった。

でもなんで今さら何だろうか

「ちゃんと思いついたよ、あの時は本当に悪かった」

とつさに謝ってしまった。

また回し蹴りが炸裂なんだろうなと構えたが菊花さんは笑っていた。

「私は一度も忘れてないよ」

どういうわけかわからなかった。

深くは聞けなかった。

「あなたがどう考えているかはわからないけど、少なくとも私は感謝してるの、あのままだったらきつと仲月菊花と言う人は居なかったから」

「あー、うんありがと」

なんだか話が噛み合って無い気がする。でもなんだか救われた。

あのと僕は救えていたんだと、決していい人になりたいわけでは無かったけど救えた。

「だから私はせんちゃんのために戦うからね」

「それとこれとは話が違うだろ、負ければ死ぬかも知れないんだぞ」

「あなたのためになら何度でも死ぬ、その覚悟は十年前から出来るの」

僕には返せる言葉は一つしかなかった。

その判断は合っていたのか間違っていたのかなんて神様だって分からないだろう。

「菊花さん、いや、菊花俺と一緒に死んでくれないか」

「初めからそのつもりだよ」

その日僕は本当のスタートラインに立った。

## 人のために命を張れるなんて素敵なことができる人拳手

昨日までは朝御飯なんて食べなかったに、まさかの菊花の手作り朝御飯だ。

ギヤルゲーとか遙かに越えて新感覚エロゲかと勘違いするほどの至福を手に入れた。

きつと今の僕の真相心理を知ったら昔助けられたことを無かったことにされかねない、それだけは避けなければならぬので裸エプロンのリクエストはしなかった。

ロマンを分かるのはやはり男だけなのだろうからな。

朝御飯にしてはポリューミーな料理の数々が机を埋め尽くしている。焼肉、唐揚げ、コロツケ、ステーキ、トンカツ、豚骨ラーメンその他：

何年ぶりだろうか、食べ物その他なんてまとめかたをしたのはいや、産まれてから一度も食べ物をその他とくくったことはない…

この料理の総額を聞きたくなるほどの量だ、大食いタレントですら胃もたれを起こすほどの食べあわせだよ。

ちよつとだけ死を覚悟するな。

しかし次々と料理が出てくる、毎日別々に食べたらきつと幸せなことなんだろうけど一度に出てきたらそれはもう核兵器並みの破壊を腸内にもたらず凶器ではない。

ようやく作り終えた菊花が啞然とする僕に「早く食べないと冷めちゃうよ」なんて言うてくる。

僕の恋心が冷めちゃうよ、なんて冗談を言えないほどにすでに腸内に爆弾を抱えていた。

そうさ、こつやつて語っている間にもしつかりと食べていたさ、それなのに一行に減らないもう怖いんだよ…

結果的には半分くらいはなんとか食べ、残りは晩御飯に取っておくことになった。

今夜は野宿をしたい気分だがそんなことを言ったら回し蹴りがまたもや回し蹴りがと考えると腸内に犠牲になっていただこ。

流石にこれ以上のおふざけは新たな章に入ったのに「なんだよギャグパートかよ」、「菊花たんの裸エプロンくむは〜」とかなりかねないのでちよつと真面目に進もうか。

菊花の話によると後五人居なければ神前試合の放棄と見なされて僕の存在が消されるらしい、最近の若者は怖いなすぐに人を殺すからな。

えっ、そういう話じゃないって、わかつてますわかつてます。

菊花を殺さないためにも自分が生きるためにもここからは【こいつのためなら死ぬる】命を掛け合えるそんな仲間を探すつもりだ。

だから今から菊花に言わなければならぬ、僕は菊花のためには死にたくない聞こえは悪いかもしれないが菊花のために生きたいとは思ふ。

菊花に死なれるのも、菊花のために死ぬのも絶対に嫌だ。

僕は菊花のために生きて、菊花と共に生きる。

だから菊花には戦いのメンバーから外れてもらうことに昨日の夜決めた。

学校への通学路、そんな重い話をする雰囲気じゃないけれど僕はそんな雰囲気が好きだ。

不釣り合いがやけに綺麗に見えるそんなひねくれている性格だから菊花を仲間としてじゃなく恋人として見ているのかもしれない。

片思いで良いのかもしれない、今はまだその時じゃないからだ。

もし次に菊花を一人にしてしまうことがあつたなら僕は僕を殺すかもしれない。

そのくらい菊花Loveなんだ。

殴りあいになるかもしれないが、殴りあいで済むなら何回だって殴りあおう

もし死んでしまったら殴りあいだってできなくなってしまうのだから。

学校に着くまでに話が出るのだろうか、僕は未だに話を切り出せずに菊花の話に相づちを打ち続けている。

菊花が味方なら負ける気がしないなんて思っている自分が居る。

愛の力とかそんな形の無いものなのかもしれないけれども不思議と負ける気はしない。

だったら先頭要員として菊花を入れても良いのかもしれない、けど君なら愛する人を戦地に送り込むそんな真似をするだろうか、答えはしないだろういくら勝算があっても確実に勝てる戦いであっても絶対に嫌だと言う筈だ。

やっぱり自分はただの子供なんだ。

自分の命がかかっていても結局は色恋にすべて流されてしまう。

それでも良いのかもしれない、いやきつといいんだろつな。

「菊花に話があるんだけどちょっといいかな」

ちよつと格好悪く声が震えてしまった。

自分でも理解した、こつ言つところが僕が勇者になれない要因難だろつと。

「ん、どうかしたのせんちゃんもしかして…お腹すいたの」

菊花はギャグパートを演じるにはいささか幼少期の経験が黒すぎて自虐的になる。

菊花にはボケではなくツツコミに回ってもらおうかな。

本題から遠ざかってしまうとこつなだつた。

なんとか軌道修正した、我ながら見事な腕前で将来はパイロットにでもなるつかと今迂闊にも考えてしまった。

こつで言つパイロットとはペンではなく職業のほうだ。

えつ、向いてないんじゃないかつて

それは今僕も思ったところだったよ。  
とにかく話を切り出す。

「菊花には神前試合のメンバーから外れてもらうことに決めた」

右か、左か、上か、下か、まさかの後ろかと蹴りを待ち構えていた  
が菊花はまるでその言葉を僕が言うことをわかっていたかのように  
笑っていた。

「ありがとうせんちゃん、私は多分そんなせんちゃんだから力にな  
りたかったのかもね別に神前試合だけがせんちゃんの力になれるわ  
けじゃないもんね」

物わかりが良すぎるのも少しだけ気味が悪いけれども、菊花は僕の  
事は全部見抜いていたのかもしれない。  
裸エプロンもばれてるのかもしれないな

「私はせんちゃんの帰る場所になるよ、いつでもせんちゃんの帰る  
場所に」

こんなに嬉しいことがあるだろうか、片思いでいいなんて事はない  
思いを伝えた方がいいなんて事もない、振られるのが怖いから告白  
をしない、片思いが辛いから思いを伝える。

どちらの間違っていて、合っている。

誰かにとっての正解は、誰かにとっての不正解  
そんな風に出来ている。

そんな世界で生きるためにも後六人

菊花のもとに帰るために



## 一人目はやっぱりバランスのとれた魔法戦士がいいよね

いろいろあつて菊花はサポートに回るようになった。

一応菊花がリストアップしてくれた運動神経抜群の部活動少女ブラス少年のリストを見る。

どれも魅力的な女性だ…、魅力的な人材だった特にテニス部の胸にはロマンを感じた。

この小説始まって以来の胸の高鳴りと期待と不安と隣に居る菊花の圧力だった。

彼女が居ようと妻が居ようとエロいことに目がいつてしまうのは当然の生理現象だった、頭の中では整理できない生理現象だった。間髪入れずに目にはいる陸上部の独特な衣装だった。

あれは顧問の趣味なのか走りやすさを追求した上でののかはやはり陸上部の顧問しかしりえない特権いや、職権つてやつか昔は夢に見ていたな女子校の体育教師を…懐かしいな。

そろそろ菊花姉さんの眼差しが激しく痛いので真面目に探そうか。まあ、今までふざけていたもののふざけられたのはすでに見つけていたからだ。

決してテニス部の胸でも陸上部の独特な衣装ではない。

もちろん本能で動くならばその二人は確実に入るのだが、流石に命がかかっている状況で性欲だけでの判断はいささか危険が過ぎる。

剣道部主将

東條真幸【とうじょうまさき】

一度だけ彼と剣道部の練習に参加したが彼は本物だった。

彼は人の道を生きては居なかった彼の生きる道は本当に剣の道だった。

能力を使わなかったとはいえ、普通の人の倍近くの運動量を普通のく半分以下の疲労でこなすことのできる僕が、彼に剣道では手も足も出なかった動きは見えても竹刀は、その竹の剣は目では追えな

つたし手には追えなかった。

そんな彼なら、命を預けるに相応しいと勝手に判断した。でもどうだろうか普通に考えたら人のために命をかけて戦うことに簡単に了承出来るだろうか。

これからがきつと骨が折れることに違いない本当に骨が折れる事がないように今は祈ることしか出来ないけど。

「東條真幸、こいつにしよう実は少し面識がある人だから話をするのは簡単だと思う、後は多少の交渉術と意地の張り合いだ」

「私もその考えには賛成だよ、てつきりせんちゃんは性欲だけで動くと思つてただけど意外と性欲を押さえるすべを心得てただね」

やはり見透かされていた、命がかかっている状況で性欲だけの判断は出来ないといったがその点でのリカバリーは他の五人で十分カバーできると言う算段が自分の中では出来ているから始めに女生徒の信頼が暑く、イケメンの剣道部の若手ナンバーワンを抜粋したのだ。

我ながら見事な判断だ。

流石にこの判断までは菊花も読めないだろう、まずは剣道部の部室に向かうのが一番なんだが口実が全くもって見つからない。

剣道部員にコンタクトを取るにはやはり剣道部入部が第一条件であるに違いない。

クラスや家が分かっているにしても、まずは友達からなんてゆっくり友情を育む訳には行かない、ましてや半年で命をかけて戦うほどに分かり合うことは普通なら出来ないことだからだ。

そういう事を色々と考慮した上で最善の選択はやっぱり同じ部活で剣を交えることが一番早くそして分かり合える選択肢だ。

東條真幸、誰からも親しまれ、誰からも敬われ、そして誰よりも剣の道を生きる男

そんなやつが味方になったならきつとそれは僕の勝利に限りなく近づくだろつ。

後は東條真幸次第と言つことだ。

時は放課後につつる。

剣道部の部室

入部届を部長に差し出す。

案外あっさり承諾されてしまった、本当は「やる気はあるのか」「少し剣筋を見せてもらおうか」とか言われたりするのだからちよつとだけ期待をしていたスポコンは全く起こらなかった。

どこかでフラグをへし折つたのか、初めからそんなことはアニメや小説、漫画の中の出来事にすぎなかったのか。

ちよつと拍子抜けしながらも部活に参加する。

春先なのに剣道着の中は熱かった。

ちよつとしたサウナスーツを来ている感じた、もつともサウナスーツと剣道着ならサウナスーツを買うが。

剣道は意外とお金がかかる。

剣道はきつと昔は貴族のスポーツだったに違いない、そんな高貴なスポーツをかわいい戦力を手にするために利用していいのだろうか、でも実際には東條真幸を仲間にしたついでに着いてくるおまけのよな物だから直接的な関係はないから大丈夫なんだろうけど。

結局は全ては持論だった。

もしかしたら別に高貴なスポーツでも無いかもしれない、棒を振り回すなんて野蛮極まりないそんな風にも解釈できる。

まあどちらにしろ今さらになって校内に爆弾を仕掛けている少女を思い出した。

三階の屋上用非常階段の近くに爆弾を仕掛けていたあの少女を。

剣道とは心を整理するにはもってこいのスポーツだと自覚した。

その時にターゲットだった東條真幸の方から僕に話をかけてきた。

驚いて今なら竹刀でギガスラッシュが放てそうだった。

まあ、あんまりドラゴンクエストには詳しくはないが多少の知識がある僕だからやっぱり火炎切り程度にとどめておくべきだったかなと、突拍子のない自らのボケにたいして反省をする。

「貴様がまた剣道部の門を叩くとは思ってはいなかった、意外と真のあるやつだったんだな」

正に武士のような精神の持ち主だが、僕だって命がかかっていなければもう二度と東條真幸とは戦いたくはない。敗けが見えているからだ。

いくら練習しても半年では足元どころか同じ土俵にすら上がれない。

それほどにまで人間ばなれした人間。

「まあ、命懸けだよ」

ちよつとだけ格好をつけて東條真幸に言い返した。

この一言が東條真幸に火をつけてしまった。

火に油を注ぐと言えば違うけれど何らかのスイッチが彼に入ってしまったのかもしれない。

武士ならば命懸けの戦いはやはり燃えるのだろうか、僕は早く萌えたいと願う。

真面目な話をするとうしろいことを話しにくくなる。

特別好きなわけではないけどエロとは力に変わる時がある。

リフレッシュには最適なんだ。

その日の部活は多少の顔合わせで終わった。

こんなペースで半年で六人集められるのかは不安だったが、その日の帰り意外な人物を目にした。そうだ。

あの、東條真幸をまさかの少女漫画コーナーで発見してしまったの

だ。

やはりエロは素晴らしい、エロ本エリアから少女漫画コーナーはすべて見渡せる。

エロ本なくしてはこの出会いはなかったのだからエロ本万歳な訳で、エロ本はもう肩身の狭い思いをせずに存分にその内部をさらけ出していいと思う。

ちょっと遠くからの菊花姉さんの眼差しが先程よりも鋭く痛い、まるで目からビームが出ているようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6601z/>

---

かみわざっ！

2011年12月23日04時49分発行